

# 介護福祉学科で学ぶ学生の高齢者意識の実態と 介護福祉教育の課題

伊藤和子

Issues of Care Work Education and Realities of  
Elderssense for Care Work Students

Kazuko Ito

## 序論

### 1. 研究の意義と目的

介護福祉教育は福祉系四年生大学、短期大学、専門学校等で広く行われている。短期大学は四年制大学と専門学校の間位置し、介護福祉教育の量と質に関わる重要な役割、機能を果たすことが社会的に期待されている。本稿は介護福祉教育の課題と短期大学に焦点をあてることによって典型的な実態と問題点を追求し、その総括をととして今後のあり方を考察することを目的にしている。

介護福祉教育の現場に、今、何が起きているのか。たとえば、異変が起きているとでもいえるのか。異変とは、介護福祉教育の理念・目的と学生の実像との乖離を指している。どのようなことが問題かといえば、介護福祉士は福祉サービス利用者の個別的で具体的な日常生活を支援し、その人らしく生きる力を引き出し、QOLや生活環境・社会関係まで視野に入れた当事者主体のサービスを担う人材である。ところが、介護福祉を学ぶ学生の基本的な生活習慣は確立しておらず、自らの健康に無関心であり、食生活へのサポートは学生にこそ必要な状況にある。基本的な生活習慣の不十分さは、人間関係を円滑に結ぶことができず、客観的にみるとささいな問題が学業継続に大きく影響を及ぼしている。このような学生に、どのようにして介護福祉教育を行っていくのが現場担当者の課題になっている。

世間的にも、今の若者に対してパラサイトシングル、フリーターの増加、引きこもり等が指摘されている。介護福祉教育現場の問題は現代の青年問題の一端を鋭く表現しているということであろうか。介護福祉を学ぶ学生たちの内面に起きている問題は、今日的な社会構造、家族構造の変化と関係している。介護福祉教育の課題は自分探しをしている学生たちへの自立を支援していく社会的仕組みの一つとして考えていくべきものであろう。

この仮説を介護福祉教育現場の実証分析から追求し、本論文は介護福祉学科で学ぶ学生の実像

を明らかにする。なぜ、ここから出発するのか、その意義は、介護福祉教育の課題をいかなる困難があったとしても、今日的な学生の実態から出発し、専門職業教育をとおして、学生の卒業後の社会的自立と利用者の日常生活の自立支援を結びつけ、統一的に取り組むことに介護福祉教育の目的と現代的課題があると考えからである。

## 2. 研究の動機と背景

当学科に入学してくる学生の中には、すでに今日の高等教育全般にわたり問題となる課題を抱えている学生も少なくない。たとえば、入学して2ヶ月あまりで授業に出られなくなり退学を希望する学生がいる。主な理由は、介護への疑問や将来の進路への不安等の本質的な問題ではない。仲のよい友人とけんかをし、明日から一緒に昼食が食べられないと泣き崩れ授業に出られなくなったり、仲間はずれにされた、好きな男子学生が同じクラスの別の女子学生とつき合い始めそれに耐えられない、学友から挨拶や話をしてくれず寂しい、朝一人で起きられず遅刻ばかりしている等々、基本的な生活習慣や人間関係を結ぶすべを知らない等の生活者としての基本的な生活手段を身につけていないことが問題の主な理由であることが多い。退学という結論を出した学生の話の聞いていると、学生は涙を流し、顔をこわばらせ、全身で辛さを訴えていることが分かる。「どうしたら通学できるようになると思うのか」と学生に解決策を求めると、多くの学生はクラス替えやゼミナール替えを希望してくる。できないと分かると一応に退学という結論を出す。家族の意見を聞いて考え直させようとする、「そんなに辛く大変なら辞めてもよい」との答えが多い。学生は退学後の生活をアルバイトや自動車学校に通いながら今後何をしていくのか考えようとする自分探しをする学生もいるが、何をするのか分からないという学生も少なくない。多くの学生は、先の見通しのないまま目の前の苦痛をとりあえず回避したいがための退学という結論を出していることが多い。

学生が介護福祉士を目指した動機はさまざまである。中学生の頃より当学科への進学を望み明確な目標を持って入学した学生もいれば、同じクラスの好きな学生が進学したので何となく後を追うように入学してしまったという動機をもつ学生もいる。しかし、退学の理由は、上記に記述したような理由が主なものである。

介護福祉士をめざす学生の多くは、個性的で多様な価値観にあふれる豊かな現代に育っているが、一方では人間関係を結ぶ経験が乏しく、人の意見と食い違うことを非常に恐れている。自分の意見や意思よりもグループ等の多勢の意見や行動に追随することを優先させることが少なくない。いつも周囲を気にして行動している。教員との個人面接では自分の意見がはっきりと言えても学生間では、「しない・できない」学生が多いのも特徴である。しかし、学生の多くは自分自身に自信はないが、人に感謝され、人のためや社会に役立つ仕事や生き方を求めていることも事実である。

退学という人生の重大な決定を下す理由があまりに唐突な動機であり、他に理由がないのかと些細な言葉の端々に注意をはらい、表情や態度に配慮をしながらの面接は緊張の連続で

ある。また、日々の学生の様子や変化を観ることに神経をすり減らす日々でもある。担当教員として当然のことではあるが、一人ひとりの学生の目線にたち、時間をかけ、相手のペースで話を聞くと同時に、学生の日常生活や生活意識について具体的に知ることが学生の本来の姿を知ることになる。また、このことが把握できていないと介護福祉教育の授業は成立しない。

しかし、介護福祉学科の学生は、将来介護福祉サービスの担い手となる学生である。介護福祉教育・介護実習をとおり、当事者主体の理念をいかす「利用者本位」「対等な関係」をどのように学ばせるのが重要な課題でもある。介護は利用者の生活を支え、時には癒しを必要とするサービスである。現代の多様な価値観をもった学生一人ひとりの日常生活や生活意識を把握することは非常に難しい。本研究は学生が介護福祉をとおして向き合う「高齢者」をどのように意識し、理解していかなければならないかに迫らなければならない。そのために、学生の日常生活や生活意識について具体的に把握し、これからの介護福祉教育の課題に取り組もうと考えたのが研究の動機であり、狙いである。

### 3. 介護福祉教育の現状と課題

社会福祉基礎構造改革や社会福祉法のもと、介護保険法は従来の福祉人材ではない、新しい養成内容に即して養成された人材を求めている。<sup>1)</sup>「措置から契約」への転換は、行政処分によるサービスの可否の決定から、利用者がサービス提供事業者と対等な関係に基づき契約を行い、サービスを選択、自己決定していく利用制度に改まった。「選択と自己決定」において利用者が不利な契約を結ばないための権利擁護・成年後見制度の問題等への新たな対応等を含め、介護福祉教育の内容も変化していくことが求められている。しかし、同法が成立し10年以上の歴史の積み重ねがありながらも、医師、看護師のような業務独占ではなく、単なる名称独占のままであり、その専門性の範囲は社会の要請に応えることなく、広がりがなく今日に至っている。

現在でも、介護福祉士は多くの無資格者とともに業務を遂行している。同法の成立時と比較して現状は、同法の成立時と何ら制度上の変化はない。介護保険制度のもと、社会福祉サービスの利用方式が当事者間の権利義務関係を明確にした契約方式への転換を図ったことに伴う制度的動向の変化により、介護福祉士が今後どのような専門的役割を果たしていくのかを明確にしていく必要が新たに出てきている。

少子高齢化社会の中で、国民の介護ニーズは複雑化・顕在化してきている。介護福祉士が名実ともに介護福祉の専門職としての確かな介護福祉サービスの提供ができるようにしていくためには介護福祉教育の充実が早急な課題である。しかも福祉現場では、社会福祉従事者の資格についての政策的、実践的な改善課題が表面化していることは確かである。

私が現在の職場に就職して初めて実習施設を訪問した2000年5月に、A施設では、職員の呼び出しアナウンスは、頭に職種をつけ氏名を呼ぶようになっていた。「介護福祉士の～さん」、「ケアワーカーの～さん」、「寮母の～さん」であった。呼び方の違いに単純に疑問をもち質問した私に、寮母さんは、「施設長の指示により4月から、ホームヘルパーはケアワーカー、無資格者は

いくら長い経験があっても寮母、たとえ若く新人でも介護福祉士は介護福祉士なのよね」「私たちは皆、同じ仕事を同じように行っているのに... 呼び出しを聞くたびに嫌な思いがしてやる気が失せるのよ。でも私の介護を利用者は誰よりも喜んでくださるからやっつけられるんですけど...」と。私に丁寧に説明してくれた寮母さんは、30数年の経験をもつベテラン職員であった。日々の経験から導き出された利用者への確かな介護技術や利用者の個々の尊厳を大事にする豊かな人間性は、利用者のみならず職員や実習生からも信頼されていることが短時間の関わりからでも伝わってきた。介護福祉教育に携ったばかりの私に、「介護福祉教育の専門職としてあなたはどのような教育をしていくのか」という厳しい課題を現場から突きつけられ、これが本論文への問題意識になっている。

介護保険制度のもと、社会福祉サービスの利用方式が当事者間の権利義務関係を明確にした契約方式への転換を図ったことに伴う、制度的動向の変化により、介護福祉士が今後どのような専門的役割を果たしていくかを明確にしていく必要が新たにでてきている。今後の介護福祉教育の課題は以下の点にある。

痴呆や障害の重い方々の個々の尊厳を守るため、個別性に応じた介護ができるよう、利用者の生活リズムやペースを主体にした食事・排泄・入浴等生活のリズムと利用者のやりたいこと・やれることの組み合わせ等をケアマネジメントできる能力をつけていくこと。

コミュニケーション技術を高め、尊厳と暮らしの回復の現実を果たせる介護の現場を確立していくこと。

重度化・重症化と向き合う力のある介護が課題である。特に職種との連携、医療・看護を理解し介護ができる専門職を育成していくことが、個別介護の専門性の発展につながる。

介護福祉教育は、集団主義的・サービス提供者主体の介護から、個々の尊厳の確立と回復を新たな社会的価値として打ち出していく理念を創造していく時代にあることを自覚できる学生を育てていくこと。

そのためには、今の介護福祉養成の短大に入学する学生の特徴から、何をどのように粘り強く励まし、自信をつけさせ、方向を示し、この分野の人材として磨けば光る人材に育てていくことができるかが課題である。

そのためには、どのような教育、技術・方法、実習教育が必要か、創造的な工夫が求められている。

## 第1章 当学科の学生の生活実態と背景

### 第1節 調査目的と方法

#### 1. 調査目的及び意義

本調査の目的は、当学科に入学した学生の基本属性や介護福祉士をめざした入学動機を調べ、

当学科の学生がどのような生活環境で過ごしてきたのか、学生の生活実態を把握することにある。現代の若者は豊かな時代に育ってきており、多様な価値観をもち短大に進学してきている。核家族化や少子化の進展により、幼少期から人との関わりや実体験の機会の少なさや親への依存が強くなっている様々な事例も指摘されている。<sup>2)3)4)</sup>

ここでは、学生の生活実態と今後の介護福祉教育の課題を統一的にとらえ、これからの介護福祉教育につながる基礎資料を得るのが調査目的である。調査目的で重視した主要項目は次の5項目である。

- (1) 学生の基本属性にどのような特徴があるか
- (2) 学生の祖父母との同居経験や関わりの有無
- (3) 入学までの高齢者や障害者等との関わりの有無
- (4) 進路決定に影響を与えた体験等は何か
- (5) 入学の動機に影響を与えた体験等は何か

本調査は、当学科の学生に対して、現代青年論の特徴を鋭く反映しているとみている。しかし、調査の狙いはあくまで今後の介護福祉教育のあり方や教育内容の改善に向けたものであり、学生の実態調査の焦点も、その点との関連において必要な基礎データの収集・分析に定めている。

## 2. 調査の対象と方法

調査対象は当学科で介護福祉士をめざす学生1、2年次生で、筆者が担当する教科に出席していた学生である。ただし、調査日に欠席した学生は対象に入っていない。調査方法は、あらかじめ調査の趣旨を説明し同意を得た上で実施した。本調査の対象は、1年次71名、2年次52名の計123名である。調査日に欠席した学生は1年次9名、2年次が1名の計10名である。調査を拒否した学生はゼロである。具体的な調査方法は、自記式質問紙法であり、用紙(資料1)を配布し、無記名の調査により終了後その場で回収した。調査期間は2004年6月の第2週から第3週である。

## 第2節 調査結果の概要

### 1. 基本属性

性別では、1、2年次生とも男子学生が12名、1年次女子59名、2年次女子40名であり女子学生の割合が高い。集計は学年別におこなったが、基本属性のデータは当学科の学生実態の把握を目的としているため学年の区別はしていない。介護福祉学科の男女別割合は全国的に女子の割合が多く一般的傾向を反映している。

家族構成では「4人家族」が41名(33%)で1/3を占め、「5人家族」が33名(27%)、「6人家族」が20名(16%)であった。家族構成は愛知県内の自宅通学生が多いという本学科の特

徴が反映している。きょうだいは「2人」が58名(48%)を占め、「3人」が51名(41%)で全体の90%あまりを占めている。一人っ子は10名で(8%)であった。続柄は第1子が80名(65%)、第2子が34名(28%)で、第1子が2/3を占めていた。父親の年齢は「50~54歳」が46名(37%)を占め、次いで「45~49歳」が39名(32%)、中には「40~44歳」という若い父親も18名(15%)いた。母親の年齢は「45~49歳」が53名(43%)で半数近くが父親より若い。次いで「40~44歳」が37名(30%)である。49歳までの母親が2/3あまりを占めていた。

両親の職業は、社会階層と経済的安定性をみるうえで重要である。父親は「雇用の正社員」「公務員」が89名(72%)、「自営業」が21名(17%)を占めており、あわせると110名(89%)となり比較的安定した家庭が多いことが伺える。父親の職業が「分からない」「無職」「雇用でパート」は合計で6%にとどまっている。母親も「雇用の正社員」「福祉・介護関連職」「自営業」「保健・医療関連職」「公務員」で47名(88%)を占め、共働き家庭の姿が伺える。なかでも「福祉・介護関連職」「保健・医療関連職」が17名(32%)あまりいたことも注目される。

住居は社会階層に繋がるもう一つの指標である。家族の住居形態をみると、「持ち家」が104名(85%)に達しており、東海地域の持ち家比率約65%と比べ「持ち家」の割合が多い。当学科の学生は県内の学生が多く自宅生が多いのが特徴であり、90名(74%)と多数に及ぶ。一人暮らしが19名(15%)、寮生が14名(11%)となっている。

## 2. 祖父母との関わり

学生の両親の多くは年齢が50歳代と若いことから、「祖父母の有無」についても117名(95%)が健在であった。「祖父母との同居」は39名(32%)あり、「二世帯住宅」「過去にしていた」を含めると51名(42%)に達していた。当短大の学生の半数近くの学生が祖父母と同居経験がある点は入学動機と何らかの形で関連しているのではないと思われる。介護福祉士をめざす学生が祖父母と同居した経験をもっていることは、そこに何らかの関わりがあったことを推察させ、祖父母とどのような接触をもってきたのか、どのような関心を寄せてきたのかを知ることが重要だと考えられる。祖父母との交流については、「ほぼ毎日ある」「一週間に3~4回ある」と回答した学生が46名(37%)あり、「一週間に1~2回ある」との回答を含めると53名(43%)が一週間に1回くらいは何らかの関わりを持っていることになる。逆に「ほとんどない」は僅か6名(5%)にすぎない。祖父母との関わりの多さに特徴が読み取れる。

## 3. 入学前の介護の経験と介護経験が進学に与えた影響

入学前の介護経験の有無については、39名(32%)の学生が「ある」と回答している。介護の経験が進学に与えた影響については「非常にある」21名(17%)、「ある程度ある」が14名(11%)あり、35名(28%)あまりが介護の経験が介護福祉士志望の動機の一翼を占めていた。「あまり関係がない」「関係がない」は3名と少ない。「記入なし」が85名(69%)もあり、どのような理由があるのかに関心がある。

介護の対象者は自由記述で、祖父母14名、施設等のボランティア活動での高齢者26名、障害者1名、曾祖母1名の42名の記述があった。介護経験をつっこんで確かめるとボランティア活動の割合が多いことに注目される。介護経験が家庭内の祖父母の関係を越えている点も興味深い傾向であり、介護経験を社会化できることを示しておりより普遍化しやすいことを教えてくれる。

#### 4. ボランティア活動の実態と進学との関わり

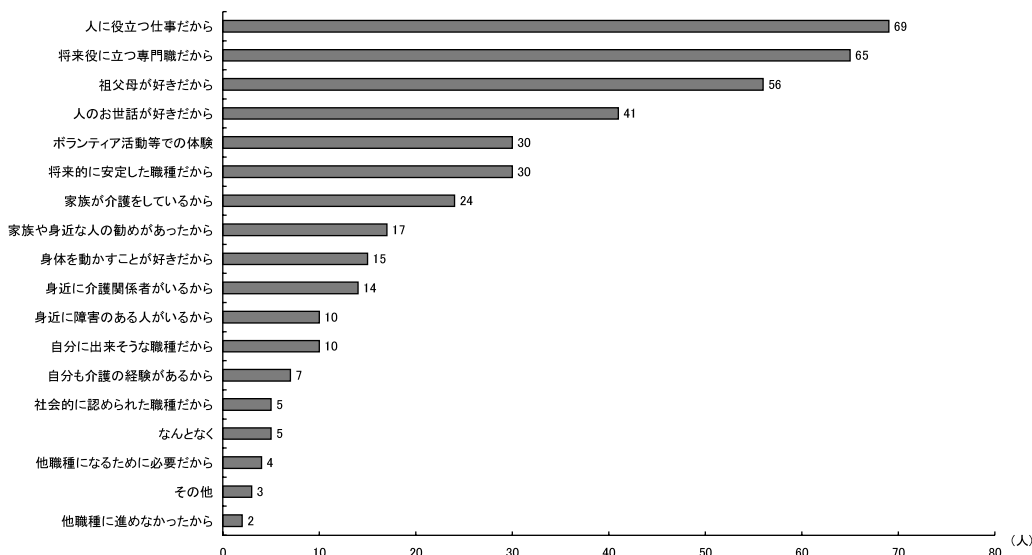
調査は学生の介護経験が進学に影響を与えていることを示している。その介護経験がボランティア活動によるところが多いというデータをさらに読み込むためにボランティア活動の内容に立ち入ってみると入学前のボランティア活動の経験については、「入学前にボランティア活動の経験がある」と回答した学生が96名(78%)であった。ボランティア活動への関心についても「非常に関心がある」「ある程度関心がある」が111名(90%)あまりを占めていた。2003年の厚生労働白書「ボランティア活動の現状」によると、個人向け調査での学生は1.4%である。<sup>5)</sup>この割合は非常に多いとみるべきであろう。

ボランティア活動はどのようなことをしていたのであろうか。入学前に経験したボランティア活動の内容については複数回答で確かめたところ、「高齢者支援」がもっとも多く76名、「障害者支援」34名、「幼児・児童支援」28名となっている。その他に、「募金活動」「環境保護・リサイクル活動」「地域活動」「災害復興活動」「外国人支援」「スポーツ指導」等多彩な活動をしてきたことが分かった。何という多様さであろうか。ワンパターンの活動ではない。一方、少数だがボランティア活動の経験がない学生もいたが、その理由は複数回答で、「きっかけや機会がなかった」15名がもっとも多く、「一緒に活動する仲間がいなかった」「活動に必要な情報が得られなかった」「適当な活動場所がみつからなかった」「身近に活動している人や誘ってくれる人がいなかった」と受け身的な学生が20名、「忙しくて時間がなかった」「活動に必要な知識・技術を身につける機会がなかった」と関心はもっていたが行動に結びつかなかった学生が10名、「特に理由はない」「関心や興味がなかった」学生が4名となっていた。ボランティア活動が進学に与えた影響については、「非常にある」「ある程度ある」と回答した者が86名(70%)、「あまり関係ない」「関係ない」が15名(12%)であった。「わからない」と回答している学生が5名いた。約70%の学生がボランティア活動で介護福祉へのイメージをつくり、入学への動機としている。何が介護福祉士になろうと思わせたのか。その背景と動機そのものについて学生の回答を次に分析している。

#### 5. 介護福祉士への動機

介護福祉士への動機は、表1のようになっている。

表1 介護福祉士への動機（複数回答）



これを大きく4点に分類できる。第1に、介護福祉につながる活動経験や生活体験があり、身近に自分の進路として具体的にイメージできているかどうか重要な動機につながっている。第2に、人に役立つ専門職であることを理解してのことであり、この点は注目に値する。第3に、自らの将来の仕事として何とかやれるのではないが、という「自分さがし」をこの道に求めようとした回答がある。第4にあげられるのは、消去法でこれしかなかったというものであるが、これは少数である。回答は複数回答で合計407となっており、各タイプの傾向は次のようである。

#### 第1表 介護福祉へのイメージができていない学生

「祖父母が好きだから」「人のお世話が好きだから」「家族が介護しているから」「自分も介護の経験があるから」「身近に障害のある人がいるから」「ボランティア活動等での体験から」と身近な高齢者や障害者、要介護者等に関わった経験を踏まえた動機をもつ学生が168名であった。身近かに介護福祉業務をイメージできるかどうか回答の主要な特徴であり、主体性を引き出しやすい素地をもっている。

#### 第2表 介護福祉を専門職と理解している学生

「人の役に立つ仕事だから」「将来役立つ専門職だから」「将来的に安定した職種だから」「身近に介護関係者がいるから」「社会的に認められた職種だから」「他職種になるために必要だから」と職業としての専門性・将来性、現場の状況のある程度理解した上での動機をもつ学生が185名であった。介護福祉職の社会的地位を理解し、進路選択に結びつけようと考えた点は積極的な側面として評価できる。



### 第3表「自分探し」をしている学生

「家族や身近な人の勧めがあったから」「身体を動かすことが好きだから」「自分にできそうな職種だから」「何となく」と周囲の進めや漠然とした動機の学生が47名であった。必ずしも介護福祉職を理解してはいないが、漠然としたイメージをもっているのではないかと考えられる。「自分さがし」を介護福祉職に向けようとしている点は、今後の介護福祉教育の中で積極性、主体性へと結びつけていくことを可能にするのではないかと考えられる。

### 第4表 消去法で介護福祉に進んだ学生

「他職種に進めなかったから」と答えた学生が2名いた。正直な回答であり、挫折感を潜在的にもっているものと思われる。しかし、第1、第2のタイプと教育交流が可能であり、イメージを描けるようになれば、次の可能性は開けてくるもの考えられる。

## 6. 介護福祉士への進路決定

介護福祉士への進路決定については、「ほぼ自分で決めた」と回答している学生が88名である。2/3の学生が自分で進路を決めていた。ここ数年のオープンキャンパスや進路相談会等において、表面的には父母の発言が多く、受験生の消極的な傾向が目につく。また、一般入試を避け、推薦入試で入学しようとする。一見して、受験生の主体的側面を評価しようとしてもなかなかみえにくい。ところが、多くの学生が自ら進路を決めているというのは十分に評価されていいし、このような積極面を見逃してはならないように思う。一方、「相談して決めた」と回答した学生は34名(28%)であった。相談して決めた学生の相談相手は自由記欄をみると、母親と高校教師がもっとも多く、ともに26名、次いで両親21名、友人12名、きょうだい4名、家族3名、福祉施設の職員2名、父親、先輩、叔母、祖父母が各1名ずつの順であった。相談して決めたこと自体がイコール消極的ではない。しかし、自分で決めたと回答した学生との相違点は、やや勧められたと学生自身が受け止めているからだと判断される。

## 第2節 当学科の学生の特性 - アンケート調査のまとめ -

### 1. 考察の概要

当学科の1、2年次生123名を対象に自記式質問紙調査の結果、次の特性が明らかになった。概括的にみると三つの特徴に分類できる。

第1の特徴は、基本属性と祖父母との関わりを中心にした部分からみられる特性である。最大の特徴は生活基盤の安定性を示す指標が多いことにある。その一つは住居である。住居は「持ち家」に住む学生が多数派となっている。これは学生が愛知県内の自宅生が多いということと密接に関連している。父親の職業も圧倒的に正社員が多く不安定雇用ではない。厳密な社会階層を示

す社会的地位や所得額まで調査項目に入っていないことから断定的に論ずることは難しいが生活基盤の安定性は確かな事実である。また、母親の多くが就職しており、福祉・保健・医療関連職の割合が多い。学生の1/3が祖父母と同居しており、祖父母との交流から推察できる近居を含めると、愛知県内の地元学生の割合の多さが浮かび上がってくる。

第2の特徴は、高齢者介護の経験をした者が1/3いることである。基本属性にみられる三世帯同居、あるいは近居という地元学生の家庭生活の実態が身近かなところで介護問題に直面するものをもっているからだと考えられる。しかし、それだけでなく、ボランティア活動を通した高齢者介護の経験が進学に影響を与えている。ボランティア活動への関心の割合が高く、多様な活動経験をもっていることが第2の特徴である。

第3の特徴は、ボランティア活動の経験や介護経験、母親が介護関連職に働いている割合の多さから、介護福祉士へのイメージをもっている学生が多い点に特徴をみだすことができる。このことから、進路決定を自分で決める割合が多く、次いで母親等への相談を通して介護福祉専門職をめざそうとしている点が興味深い。

以上の三つの特徴の分析から学生の高齢者に対する認識や、介護福祉教育へのイメージをもっと具体的に高めていく教育方法をとることができれば、一定の専門職教育が可能となる素地があると評価できよう。

第1表

学生は持ち家に住む者が大多数を占め、自宅生が2/3を占めている。  
 父親の職業は、大多数が雇用において正社員等の職業に就いている。  
 母親の職業も雇用において正職員が大多数を占め、共働き家庭が多い。  
 母親の職業は、福祉・介護関連職、保健・医療関連職に1/3あまりが就いている。  
 父親の年齢は、50歳前後が2/3弱を占め、母親も40歳代が2/3強を占めている。  
 家族構成は、4～5人が半数以上を占めている。  
 きょうだいは、大多数が2～3人であり、第一子が半数以上を占めている。  
 学生の1/3は祖父母と同居している。また、学生の半数は祖父母と何らかの交流を一週間に1回以上は持っている。

第2表

学生は入学前に介護の経験がある者が約1/3あり、その経験が進学に影響を与えている者が1/3弱あまりいる。  
 介護の経験が進学に影響を与えたかどうかの質問に「記入なし」の学生が半数上いた。  
 学生は入学前に何らかのボランティア活動の経験を2/3以上がしている。  
 ボランティア活動への関心がある学生がほとんどである。  
 ボランティア活動の内容は高齢者支援がもっとも多く、多彩な活動をしている。  
 学生の介護の対象者は祖父母やボランティア活動で訪問した施設の高齢者である。

## 第3表

学生の半数以上はボランティア活動の経験が進路決定に影響を与えている。  
介護福祉士への進路決定は2/3以上の学生が自分で決めている。  
相談をして決めた学生の相談者は、母親と教員がもっとも多い。  
介護福祉士への動機は、自らの経験やボランティア等の体験をとおしてや、職業の社会的役割や将来性等である。

## 2. 学生の生活実態

当学科で教育職についていると日々学生の言動に驚かされることが多くなってきている。調査結果と教育現場でみられる学生の実像をつきあわせるために、学生生活からみた学生の生活実態の分析と考察を行った。

若い学生達の言動をただ「若いから」「甘やかされて育ってきているから」と一括りに判断することはできない。しかし、何かがある。そこにある何かとは、まず、気がつくことは学生達が多様で个性的であると言う事実である。教員には摩訶不思議な言動にも学生なりの意味やそれなりの理由が必ず存在している。学生は自らの行動や意識を、自分が必要としない限り積極的に説明することはしない。人との関わりをもつことが苦手でコミュニケーション能力が弱く、信頼関係が育まれ、成立していないと自ら関わろうとしないのも特徴的である。したがって、一定の信頼関係を築かないと学生の実像が掴めなくなってきている。筆者が日常体験した当学科の典型的な事例から学生の生活実態の特徴を明らかにした。

## (1) 排便が10日以上ない学生

休日に学生から携帯電話で「救急病院にいる」と連絡が入った。緊張し身構えて聞けば、「先生、うんちが溜まっているので、管で出すのがよいか、薬を飲んで出すのがよいか、どっちがよいか、今すぐに返事をしなければならぬからどうしよう」という問い合わせであった。学生は一方的に「どっちにしたら良いか」との判断を求めるのみで詳しい状況や説明は一切しない。しかし、当の学生にとっては結果が相談事であり、その過程を説明する意思はまったくない。丁寧な前後の状況を聞き出し、一つひとつ確認しながら状況を把握していくしか方法はない。

この学生は突然激しい腹痛があり死ぬかと思ったほどで我慢ができず、一人暮らしということもあり救急車で緊急受診となっていることがやっと分かった。レントゲン撮影により大量の糞便が確認され、10日以上排便がないことに本人も気づき、高圧浣腸か下剤での排便の選択が求められるという訳である。学生にしてみれば、苦しさから解放はされたいが恥ずかしいことはしたくない、でも薬ではこの苦しさがしばらくは続くことになり、また、緊急事態も予測されると説明されればどうしてよいのか判断がつかなくなってしまったという訳である。

このようなレベルの相談は日常茶飯事である。日々の関わりの中で、信頼感が育まれているからこそこのような相談があると理解すればよいが、授業の中で排泄について具体的な事例を含め

て学んでいるはずなのにと考えると、授業をしている者としては暗澹たる思いがある。

後日、「私の救急車乗車体験」として学生に発表の機会を設定した。内容が排泄のことだけに抵抗がなかった訳ではないが、自らの体験が今後の仲間の介護にも活かされていくための貴重な体験になるとすんなりと引き受けてくれた。

この学生は、これまで排泄が10日～2週間ないのは当たり前という生活をしてきている。一人暮らしでもあり、自分としては栄養もあり好きな焼き肉を二日おきくらいに食べ健康管理に努めているつもりだった。知識として食物繊維が含まれている食材は知っていたが、野菜や海藻類等は好きではなくほとんど食べることはなかった。家族は「食事をしているか」と心配して電話をくれるが「何を食べているか」については聞かれたことはなかった。初めての一人暮らしであり、自分なりに考え好きな物をしっかりと食べるように努力してきた。排便がなくても日常生活に特に支障もなく、いつかは出るので考えることもなかった。この学生の語る食生活のあり方・排便状態に同調している学生が少なからずいたことは確かであった。学生は最後に、「浣腸をしたら、便が便器の中で山のように出てきて驚いた。しかも、3回もあった。排便後は下腹が凹んでジーンズが緩くなってびっくり。何ともいえない爽快感がした。翌日にはニキビに悩んでいたのが嘘のように消えた。食事がおいしいのにもびっくりした。先生が『排泄に問題があると食事ができない。食欲がない利用者は排泄に問題がある』と言っていたことを思い出した」と発言していた。

人間の生活を支えながら、その人の生活の質にも目を向けていかななくてはならない介護福祉士が、日常の自分自身の健康に目を向け意識していくことの必要性を指導していくことが求められる事例である。学生の生活実態と健康に対する意識に関する研究もあるが、回答しづらい内容であるのか排便に関する項目は見あたらない<sup>(6)7)8)</sup>しかし、排便の頻度を聞くと毎日あると多くの学生が答えるが、雑談の中では、便秘傾向の学生が多いように感じる。日々の排泄への関心のなさは自分自身の健康管理への無関心さとも深く関わりがある。

## (2) 朝食を食べない・食べられない学生

大学生が朝食をきちんと摂らない、きちんと摂らせようという大学や生協が知恵を絞っている。<sup>10)</sup>当学科の学生の多くも朝食をとらない学生が多い。介護技術の演習ができず座り込む学生もいる。自宅通学で祖父母との同居が多い当学科の特徴を考えるとどのような理由で食べないのか・食べられないのか典型的事例について聞き取り調査した。<sup>(注1)</sup> 自宅生で三世同居学生、自宅生で核家族の学生、一人暮らし学生の3名である。

### 自宅通学で高齢者と同居学生Uの場合

父親が朝食をとらない習慣があり、長女である学生も記憶が残っている保育園時代からまったく食べる習慣がなかったという。しかし、母親や妹は自分たちの好きな菓子パンを食べているし、祖父母はご飯を自分達で作って好きなように食べているので、食べられない訳ではないが長年の習慣により食べることは考えられないし、食べたいとも思わない。食べなくても今まで何の

支障も感じたこともない。朝食は家族各人が勝手に好きな物を好きな時間に食べるのが当たり前になっており、家族みんなが揃って朝食を食べる習慣は幼い頃よりまったくない。

#### 自宅通学で核家族学生〇の場合

朝食は食べている。中学生の頃より食事の内容は自分の好きな菓子パンかロールパンで副食は食べない。飲み物は好きな炭酸系のサイダーが多いが、時々ダイエットを考えペットボトルのお茶を飲むこともある。ご飯やみそ汁があっても食べることはない。朝食について家族から何かを言われたことはまったくない。妹もいるが自分と同じように好きなようにしている。家族揃って朝食を食べる習慣はない。

#### 一人暮らし学生Ⅰの場合

まったく食べない。食べるよりギリギリまで寝ていたいし、むしろ食べることは面倒なことである。朝からボーとしていることもあるが、朝食を食べないからという訳ではないと思う。朝食にかけるお金は、友人と一緒に食べる夕食や外食に使いたい。「朝食と健康」についてはまったく意識したことがない。自宅にいた時も食べたり食べなかったりで特に問題もなかったし家族から何か言われることもなかった。

前記の新聞記事によれば、朝食を抜くことが生活の乱れにつながるとの考えから「保護者に代わって食生活の改善を促そう」と朝食への取り組みをしている大学の紹介であった。「そこまでしなくても」という声もあるが、「食育の最後のチャンス」の場と捉えられている。当学科の学生も「食べている」と答えている学生でも、食の内容を詳しく聞けばきちんと食べているとは言いがたい内容である。食に関する自己管理能力がないと判断せざるを得ない事例である。

### (3) 寝間着を持っていない・寝るときも寝間着に着がえない学生

介護技術の授業で、衣類の着脱介助の演習のために自分の寝間着を持参するように指示をした。ところが学生の多くは寝間着を持っていないという。40人のクラスの2/3強の学生が寝間着を持っていなかった。何を着ているかといえば、多くの学生はジャージや短パンとティシャツの組み合わせであり、入浴後に着るといっても部屋着も兼ねたものであり、着ていて楽でコンビニ程度の外出も簡単にでき便利だという学生が多かった。聞き取り調査した一人暮らしの学生Ⅰの場合はその典型事例である。中には数人だが、翌日に着ていくティシャツを着て寝るようにしていると答えた学生がいた。睡眠時間の確保ができ朝の準備の時間短縮にもなり、洗濯物も少なくてよいという。むしろ寝るときにしか着られない寝間着よりも便利であると発言する学生が多いことが印象的であった。

たかが寝間着といえども、身体の清潔の保持はもとより、生活に適した衣類を着ることは生活のリズムを作り、個人の役割や自己を表現する役割をもつものでもある。また、衣類はその人の生き方や個性、生活の内容に関わる自己表現の一部である。たとえ寝間着であっても、現代の学生の衣生活の一端を知ると、一人ひとりの個性を考え、生活を支えていくことを教えていく難

しさを実感する事例である。

#### (4)「もったいない」は理解できるという学生

実習巡回指導時、学生が涙目でしょげている。困っていることがあるのかと聞くと、食事の介助中に利用者が「種を取った梅干し」を床に落としてしまったので、学生はグシャとして床を汚して汚かったので急いで拾い捨てようとしたところ利用者から激しく怒られてしまったという。学生は「食べようと思っていた物を落として残念なことは分かるが、床に落ちた汚れ物は早く片づけた方がよいと考えて捨てたのに、どうしてあんなに怒られたのか分からない」と不満気であった。利用者がどのように怒ったのか具体的に聞くと「もったいない」と強く言われたという。学生は「(たかが)梅干しだよ」「ほしければもらえばよいのに…」と言う。

80歳代の利用者のいう「もったいない」の意味が理解できず、学生の生活経験範囲内の意識で精一杯受け止めようとしているが、利用者の言動がまったく理解できていないことが伝わってきた。学生にしてみれば、梅干しはスーパーで売っている総菜の一部であり、おにぎりの具の一つでしかない。利用者が生きてきた歴史の中で「梅干し一つ」にどのような意味があったのかは理解しがたいことであろう。80歳代の利用者にとって、現在の梅干しは副食の漬け物の一品であっても、この世代の日本人にとっての梅干しは、家庭では「食べる」だけでなく「病を治す・予防する」身近で貴重な食材の一つであり、手間暇かけた大切な食べ物であったはずである。利用者との現代の学生との間に、梅干しへの関わりや思いに大きな隔たりがあることは当然なことである。学生にとって「もったいない」は何かと聞けば、「もったいない」という感覚は理解でき生活の中でもある。しかし、それは「直接自分が支払うお金」に直結した内容である。利用者の生きてきた生活・文化に関わる中で「もったいない」を想像できるよう具体的に理解させていくことが改めて求められている事例である。

## 第2章 学生の高齢者に対する意識

### 第1節 調査の目的と方法

#### 1. 本調査の目的と対象者の背景

将来介護福祉サービスの担い手となる介護福祉士をめざす学生に、「利用者本位」「対等な関係」をどのように学ばせるのかは、介護福祉教育の重要な課題である。特に介護の対象者である高齢者は、複数の疾病をもち、慢性的に経過しやすいなどの特徴から、医療中心から日常生活の支援や助言を中心とした生活の自立や生活の質の向上をめざす介護の実践が求められている。介護は支援を必要とする人々を人生の先輩として尊重し、その人がその人らしくその人にあった日常生活が維持できるように、また、時には安らかな死を迎えられるように支援していかなくてはならない。

当学科の介護福祉士養成課程に入学してくる学生は、必ずしも介護福祉士になることを固定的

に考えていない学生も少なくない。また、心に問題を抱え介護福祉士をめざす学生の中だから一緒にやっていけるのではないかと期待し、入学してくる学生も少なからずいるのも現実である。自らの健康管理や日常生活の自立もままならない学生に、利用者の日常生活を豊かに想像することは困難である。利用者の生活を具体的に支援することなど期待はできない。まして、高齢者が生きてきた時代や生活背景を理解することはもっと困難で非常に難しい課題である。

しかし、高齢者や障害者の生活を支援する介護福祉士にとり、利用者が生き生きと生活してきた時代の様子を共有することは、利用者を理解する上で欠かせない課題でもある。

当学科の学生の多くは、ボランティア活動の経験も豊富にあり、進路決定も自らの意思で決めていることが分かった。作山、松井らの調査によっても進学の意味決定は、男女差は多少あるもののほとんどの者が「自分の意思」で決定している。<sup>11)</sup>また、介護福祉士を希望した動機も「人や社会のために役立つ仕事がしたい」「やりがいがある仕事がしたい」がもっとも多かった。当学科との結果に大差は認められなかった。

将来、年老いた両親を養うことについての問いに、「将来どんなことをしても親を養う」「自分の能力に応じて親を養う」という学生が男女とも3割前後いた。当学科ではこの質問項目を設けていないので比較はできないが、将来の現実的問題への対応をも視野に入れた入学時の意識を問うてみる必要もあった。そうすれば、自分が家族の一員として果たすべき責任感等についても把握することができたものと考えられる。

当学科の学生は進路決定は自らの意志により入学した学生が多いが、人間関係や社会関係の結びつきが弱く、うまくいかなくなると困難から逃げようとし、そこから立ち向かって改善する意思を示せない学生が多い。学友と話し合えば分かりあえる程度の些細ないき違いが退学にまで結びついてしまう学生もいる。教員の助言を受け、家族に相談すると、学生の悩みをいとも簡単に解決する手段として学生の望みに安易に従う現状もある。介護福祉士をめざす学生が、現在までの成長過程で基本的な生活経験や生活習慣、人との信頼関係や生活感覚をどのように育み、身につけてきたかは介護を实践するうえでの介護観に関わる重要な視点である。ものごとが順風満帆の時はいいが些細なトラブルに弱きの虫と消極的対応が目につく学生の実像を掴み、それを介護福祉教育に繋げていく視点と方法が今求められている。

そこで、学生達が比較的関わりが多くあり、一定のイメージをもっている高齢者に対し、どのような意識をもっているのかを明らかにし、学生の高齢者観を豊かに育む教育をしていくことで方向づけをしていけるのではないかと。学生の高齢者に対する意識は、今後の介護実践に影響を与えることを考えると重要な課題だといえるからである。

## 2. 本調査の対象者と内容

対象者は、当学科に2004年4月に入学した学生のうち、筆者が担当しているゼミナールの学生16名（女子13名、男子3名、内社会人入学生女子2名）である。調査期間は、調査目的と方法を学生に理解してもらう上で教員と学生、学生相互の人間関係が成立しはじめる時期に設定した。

そのことから、入学後の様々な学校行事がすべて終わりゼミナールの仲間にも慣れ、授業もスムーズに進められるようになった時期が学生の入学時の意識も残っており、意識変化を追求していくうえで最も適切であると考えた。2004年5月20日～同年6月24日で、週1回あるゼミナール(90分)の時間内に実施した。ゼミナールの学習計画の中に、調査項目を入れゼミナール全体の学習に影響が及ばないように配慮し、学生には調査の意図を説明し同意を得た上で実施した。ゼミナールの進め方や学習方法については、学生と協議し相互理解を基本としている。学生の欠席は、第1回目に5名の欠席があったがそれ以降は全員出席している。調査内容は次の2項目である。

- (1) 学生の高齢者に対するイメージ
- (2) 高齢者に対する意識変化のプロセス

### 3. 調査方法

学生の高齢者に対するイメージが記述できるように、文章完成法テストに準じて質問紙を作成し、学生が考える高齢者像を自分の言葉で記述し文章を完成させるようにした。ゼミナールの学生達は、三世代同居学生が7名、核家族学生が8名、一人暮らしの学生が1名であり、高齢者と同居している学生が半数近くいることから、高齢者イメージも自らの体験から個別性のある表現がしやすいのではないかと考えた。また、同居していない学生との差が明らかになりやすいことも考えられることから文章完成法に準ずる質問紙法を選択した。質問用紙は、「高齢者は...です。」(A4紙1枚)に最大15項目の枠を作った。無記名でその場で回収した。高齢者意識調査は先行研究でさまざまな方法で実施されているが文章完成法での調査は少ない。<sup>(12)(13)(14)</sup>

調査の回数は、次のとおりである。

入学直後の第1回目

高齢者疑似体験(以後疑似体験)演習後の第2回目

元気な高齢者へのインタビュー後(以後インタビュー後)の第3回目

以上の3回は同じ方法で実施した。

インタビュー後に、高齢者インタビューの感想をまとめさせた。<sup>(注2)</sup>

## 第2節 調査の実際

### 1. 入学直後の第1回目

質問用紙を配布後、ほとんどの学生は調査の目的、趣旨を理解することができた。しかし、なかなか記入することができず自宅に持ち帰りたいと申し出た学生が1名いた。この1名の学生をどうするのかを考えここでとった方法は、なぜ自宅に持ち帰り時間をかけてやってくるのかへの引っかかりである。そこで何がこのような発想に結びつくのか、他の学生とも共通するものがあるのではないかと考えた。再度の説明を行い、学生の反応をみた。身近な高齢者や通学途中で見



かける高齢者、入学後に学んだこと等を思い出し書けるところまでよいと説明を繰り返したところ、学生は評価を気にしており「全部書けないと点数が悪くなる」と答えた。調査の目的が十分に理解されていないことがここではっきりと分かった。再度ゼミナールの学生全体に調査目的の説明を行った。学生は安心した表情をみせ、「何を書いてもいいんだね」「思ったことを書けばいいんだよね」と再確認する学生もあり、再度の説明が評価に結びつくものではないことの再確認となり、より安心したという雰囲気は学生間に流れた。学生にしてみれば、教員からの配布物への記入・回収は評価と結びつくものであり他者との比較や競争心、不安等がつきまとうことは当然のことである。目的を丁寧に説明し、理解できているかどうかを学生の個性にあわせ確認しながら進めていく必要性が再確認でき、全員が納得し、安心して記入したものを回収できた。調査がテストではない点を明確に説明し、理解してもらうことが第1回目の焦点であった。11名の学生が156個記述している。

## 2. 疑似体験演習後の第2回目

第1回目は入学直後の学生の高齢者イメージ、高齢者観を確かめることが目的であった。高齢者を外からみていた学生に内在的に理解を促す方法は踏み込んだ体験学習が適切な方法となる。そこで、先行研究や先行事例に学ぶと、高齢者体験は老年期をいかに生きるかを考え、老年期の生活を実感するとともに、いかに老年期のその人に寄り添ったケアをしたらよいかに関心をもつ効果があることを示している。また、体験後は、具体的で自らを高齢者の立場においた記述がなされているとある。<sup>15)16)</sup>

高齢者疑似体験セット“おいたろう”<sup>(注3)</sup>の装着体験<sup>(注4)</sup>を計画し、高齢者疑似体験を90分演習した。中川は体験学習について「人間を動かす、あるいは自分を変えるためには客観的知識だけでは不十分で、大事なものはイメージで、このイメージを変えるのが体験学習である」という。<sup>17)</sup> 今回の第2回目の調査はまさにこの学生のもつ外部からみた高齢者イメージをいかに変えることができるかが焦点であった。16名の学生が237個記述している。

介護経験やボランティア活動をとおした学生の高齢者イメージを単なる進学への動機づけから、介護福祉教育への舞台に立たせるには、具体的な高齢者像を理解できる利用者体験の学習が必要である。疑似体験は医学教育から始まったものであるが福祉教育への初期的導入の先行事例もあるので今回調査に組み入れた。<sup>18)19)</sup>

疑似体験の目的を簡潔に表現すると次のようである。

学生が考える想像の世界の高齢者を疑似体験をすることで高齢者を生活者として具体的にイメージ理解することで、従来の高齢者イメージを転換させる。

高齢者を外見的な変化や一般的な高齢者像の理解にとどまらず、高齢者の内面的な思いにも気づけるようにし、介護福祉教育への舞台に立たせる導入とする。

高齢者体験をとおし、高齢者理解を知識だけにとどまらず、介護者としての援助への気づ

きに結びつけられるようにし、専門職者としての心構えができるようにする。  
高齢者の生活環境がいかに危険性に満ちているかを体得し、具体的な改善や方策・工夫について目を向けられるようにし、利用者の視点、立場から介護のできる力を養う。  
適切な福祉用具を使用したり、物理的バリアー除去の設備を積極的に活用し、その効果と限界を体験し、福祉機器・補助具等への関心を引き出す。

体験学習の目的は体験と知識の統合を図ることにある。教員が準備した学習プログラムに沿って、学生自らが主体的に学習し、自らの身体や心、能力や感覚など自分のすべてを駆使し学習することに意味がある。そこで以下のような疑似体験の必須プログラムを設定した。

階段の昇降を杖と手すりのそれぞれを使用し、いずれも3階まで昇降する。

社会福祉学科の建物は2階建てのバリアフリー構造で、学生の授業がこの建物内で行われることが多いことから、他学科の旧式の建物環境で体験せざるを得ない設定とした。若者にとり2階までの昇降はさほど苦痛な動作ではないが3階までとなると多少の負担感もあるのではないかと。また、日頃あまり体験していない3階までの昇降は新たな体験となりうる。

和式・洋式の各トイレで排泄（ポーズ）行動を取ってみる。

短大の建物は必要により増築されており、各建物によりトイレの位置や構造・広さにバラツキがある。装具を着けての体験はトイレ環境により動作に大きな変化を及ぼす。動作が安全にスムーズに行なわれるためには環境がいかに重要か、また、その反対の場合も具体的に体験できるよう設定した。

コンクリート舗装道とジャリ道（駐車場）を歩いてみる。

足元の不安定さが及ぼす影響や履き物の種類により、普段何気なく歩いている所でも変化があることを身もって体験できるようにした。

スロープを歩いてみる。

学生は普段は階段を使うことが多くスロープを歩く姿を見ることは少ない。しかし、装具を着けスロープを歩くときの安定感や安心感は、普段の生活がいかに高齢者や障害者にとり危険が多く、事故と隣り合わせの環境であるかを理解させることになる。

立っている自分の位置から手の届く範囲での高低差のある物を取ってみる。

学生がどのような動作を想定し行うのか、期待と不安が交差したテーマである。しかし巡回していると学生達は自動販売機でジュースを買ったり、図書館で様々な位置にある本を取ったり、談話室でリモコンを使わずテレビをつけたり、低い位置にあるボックス内の新聞を取ってみたりと、各グループで様々な動作を工夫していた。重心を低くすることで身体が安定する体験と、膝を曲げることが困難でそれができないことがいかに不安定で無理な姿勢であるかを共に体験できるようにした。

短大内にある様々な肘掛け椅子や丸椅子、ベンチ等複数の椅子に座り、座り心地や立ち上

がり行為の変化を体験してみる。

短大内にある椅子の多くは、安定感や見栄えは良いがどっしりと重く固い物が多いように感じる。座り心地がよいとはいえない物もある。学生が比較的好んで座っているのは簡単な丸椅子であることもうなずける。学生達は様々な椅子に座り、立ち上がり動作をして何を感じるのだろうか。椅子の機能は座ることだけではない。座りやすさ、立ち上がりやすさも含め座りやすい椅子であることを体験できるよう設定した。

その他、高齢者の日常生活を想像し、グループで相談しながら様々な体験をするよう指導した。

学生達にとり課題を果たすだけでも時間の制約との闘いである。その中でも学生達の豊かな感性は様々な体験を工夫し実践していた。特に目についたことは、現代の若者の生活に欠かせない携帯電話やダイヤルでの電話等、自分たちの生活に欠かせない生活行動を実践していたことである。また、装具を装着しての姿勢の変化が及ぼす身体的不安定さは時には学生の悲鳴となった。悲鳴を上げた学生は、介護者役をしているとき筆者に、「自分の祖父母の部屋が散らかっていたのは、『年寄りだからしかたがない』と思っていたがそうではなく、暮らしやすい工夫なのだと分かった」と話した。まさに体験により、高齢者へのイメージが大きく変化した瞬間であった。

高齢者疑似体験は、これまでの自分の体験や持ち合わせていたイメージと異なる体験である。「自分が考えていたことと違う」という気づきがあるかどうか、高齢者を具体的に意識し、高齢者一人ひとりに個別性があることを気づかせることになる。

### 3. 疑似体験のまとめ

第2回目の調査は、疑似体験演習後のゼミナールの開始直後に調査を実施した。全員がスムーズに短時間で記述をすませている。学生達は疑似体験の課題をグループ内で相互に協力しあい効率よく取り組んでいった。各グループの個性が発揮され様々な工夫もあった。

ある男子学生は、携帯電話が上手く使えない体験は、駅の自動販売の切符を買う高齢者がいつもモタモタし「かったるい」とイライラして待っていたことを思い出したという。高齢者は財布から小銭を出すことも大変で、自動券売機の細い穴に小銭を差し入れることはもっと大変で困難なことに気づき、動作が鈍いのは実は致し方ない状況にあると気づいたという。

いずれにしても、疑似体験は、面倒でできれば避けたい存在でしかなかった高齢者を、新たな視点で見つめることを学ばせた。高齢者の日々の生活は、心身の機能低下による不自由さがあり、不便や不安を抱え、危険と隣り合わせの生活をしていることを身をもって気づかせた。

また、ある学生は、自分の祖父の口癖である「疲れた」を連発している自分に自分でびっくりし、これは「じいちゃんの口癖だった」と改めて気がついたと語っていた。

高齢者の行動や動作の意味は、決して目には見えないが、それには一つ一つに意味があり、その意味を知ることが高齢者の気持ちや思いを知ることになる。

身体的な特徴の変化の一部である感覚機能の衰えや持久力の低下等を知るとは高齢者のマイナスイメージを変え、相手の思いや心身の苦痛を推しはかりながら支援していく一つの尺度となることを学ばせた。

疑似体験は高齢者の日常の何気ない生活動作の一つ一つが予想以上に大変で、すべてに時間がかかること、不自由であることは辛いだけでなく、不安や孤独感がつきまとい、常に危険にさらされていることを気づかせ、そうせざるを得ない高齢者の現実の姿に愕然とし大きな驚きとショックを伴う形で学生に理解されていた。

#### 4. インタビュー後の第3回目

インタビューの目的は、高齢者との同居学生が比較的多いという当学科の特徴があるものの、若い学生が元気な高齢者と真正面から関わる機会はそれほど多くはない。まして直接、話を聞く機会はほとんどないといえる。したがって、高齢者へのイメージや高齢者観はどうしても加齢に伴うネガティブな印象を中心に、「年齢の割には努力している」というような漠然としたものになりやすい。このような傾向や学生相互の中にあるブレを共通の体験によって介護福祉教育への導入に繋がる方向にもっていく必要がある。そのようなことから、住み慣れた地域で暮らす高齢者の生活史を聞くことは、高齢者や高齢者を支え・支えられている家族や地域の人々のことを知り、高齢者の生きざまを理解する体験学習となる。知識や先入観だけではなく、同じ時代をともに生きている存在であることを理解し、自らの高齢者観についても考える機会として設定した。

インタビューの対象者は、当短大所在地の社会福祉協議会の協力を得て、短大所在地の老人会会長を紹介していただいた。筆者が老人会会長宅を訪問し、直接インタビューの趣旨を説明し、会員の中から協力が得られそうな4人を選出していただくように依頼をした。インタビューは、高齢者の生活をとおして、個々の高齢者の個性と特徴に気づきしていく方法をとった。それは今後の高齢者介護がまさに個の尊厳にいかに対応できるかが基本的テーマになると考えたからである。高齢者インタビューについては学生の感想文を中心に、同一の老人会会員に、同じ条件でインタビューをした4人の学生が何に注目し、どう感じ、考えたかを分析、考察したものであり、それぞれの相違点に注目させられるものがみられた。しかし、本論では紙幅の都合から調査結果の概要や分析を割愛している。結論部分だけを「結びにかえて」で取り入れているが別の発表に詳細の報告を譲ることにしている点をお断りしておきたい。インタビュー後の記述数は16名の学生で237個である。

### 第3章 調査結果の質的分析

#### 1. 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ法による分析

学生の高齢者に対する意識変化のプロセスを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ法を用い分析した。量的調査も併せて行っているが紙幅の都合で他に譲りたい。質的分析を重視し

たのは学生の意識変化のプロセスがより重要な意味を分析的にもっていると考えたからである。

グラウンデッド・セオリー・アプローチ法は、1960年代にアメリカの社会学者グレーザーとスト劳斯によって提唱され、データに密着した分析から独自の理論を生成する研究方法である。人間をめぐる現象の理解を重視する質的研究であり、理解のために何かを測定したり検証したりするのではなく、解釈による意味の探索を重視している。最初は看護領域で関心をもたれ、徐々に対人援助にかかわる専門職である社会福祉学、教育学などの領域に導入されてきた。しかし、グラウンデッド・セオリーの理解をめぐり、データの分析方法の違いにより様々な受け止め方の対立が課題として残されている。

木下は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ法（以下、M - GTAとする）では、データの範囲を「この範囲に関する限り」と限定することで分析結果をまとめやすくしている。分析方法は、データを切断せずに概念を創りだし、この概念を最小単位として、概念と概念のまとまりとしてカテゴリー生成を行い、そのプロセスを明らかにしていくことで実践的に活用できる理論生成を行う方法である。<sup>20)</sup>

#### （１）M - GTAの研究対象

M - GTAに適している研究として、次の４点が指摘されている。実践的な領域が最適である、社会的相互作用に関わるレベルにあるもの、現実に問題になっている現象で、研究結果がその解決や改善に向けて実践的に活用されることが期待される場合、研究対象自体がプロセス的特性をもっていることである。

#### （２）M - GTAに適した研究か

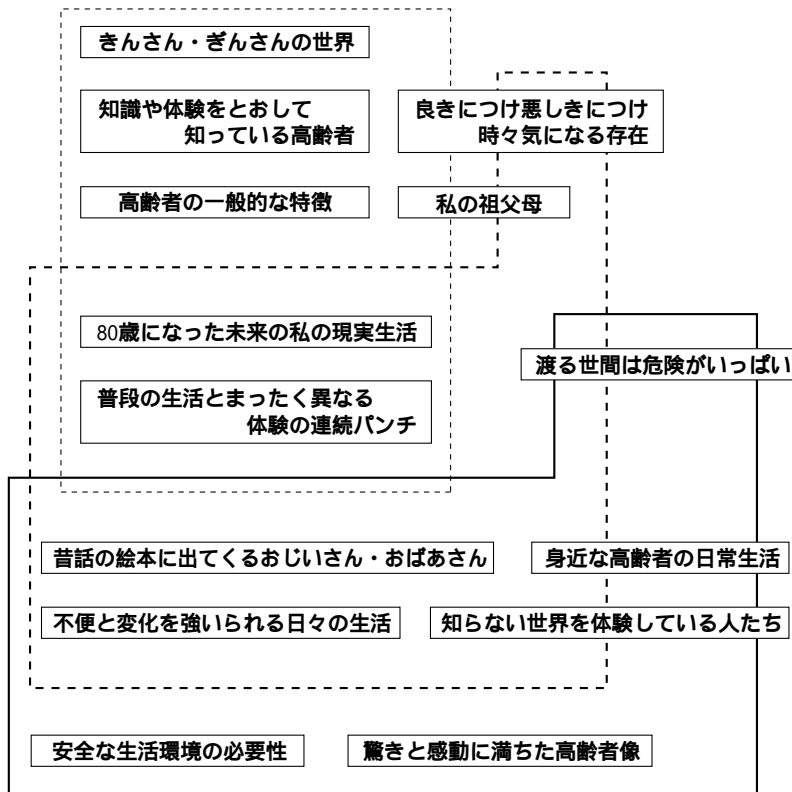
学生の高齢者に対する意識と意識変化のプロセスを、入学直後、疑似体験後、インタビュー後の３回にわたり実施した。入学直後では、高齢者と同居している学生にとっては高齢者は家族の一員であり、当たり前な存在で特別な存在として意識はしていない。しかし、高齢者と同居していない学生にとっての高齢者は、身体機能の低下により衰え、弱いものとして意識され、テレビなどからつくり上げられたイメージ等も加わり未知な存在であり、理解しがたい存在ともいえる。しかし、疑似体験では、老化や障害体験という質的な生活変化の体験をとおし、具体的に高齢者の心身の機能変化を身をもって体験したことや、高齢者へのインタビューをとおし身体機能の衰えは否めない事実であっても、高齢者一人ひとりの生き方や生活には活力があり、困難を乗り越えてきた自信や誇りを持ち、尊敬に値する存在として受け止められ学生の高齢者意識は大きく変化していった。その意識の変化のプロセスは、介護を学ぶ学生にとり具体的な支援をしていく上で、支援の方法に決定的な影響を与えることになる。このプロセスの変化を明らかにすることはこれからの介護福祉教育に役立つものと考えられる。

## 2. 概念の生成

M - GTAの手法に従い、一人分のデータ全体に目をとおり、関連のありそうな内容をひとつのまとめりとして捉え、分析ワークシートのヴァリエーションの欄に記入し、全員のデータから同類のデータがあれば、分析ワークシートのヴァリエーションの欄に追加記入し、一概念一分析ワークシートとして14枚作成した。一定のヴァリエーションの確認ができたところで内容の意味を解釈し、それを定義とし、その結果を概念として作成した。

### (1) 概念からみた学生の意識変化のプロセス

概念からみた介護福祉学生の高齢者意識変化のプロセスを以下の図1にまとめた。M - GTAによる学生の意識変化の概要は、意識変化のプロセスとして図示すれば図1のとおりである。



#### 四角の囲みの種類

- : 概念
- : 入学時の学生の高齢者意識
- : 学生が体験により変化した高齢者意識
- : 学生が新たに獲得した高齢意識

図1 概念からみた介護福祉学生の高齢者意識変化のプロセス

学生の意識の出発点は「入学直後の高齢者に対するイメージ」である。いわゆる「きんさん・ぎんさんの世界」は加齢による身体変化の特徴が「顔のたるみ」、「白髪」、「肌にシワ・シミ」や「無表情」、「入れ歯」等という形で表現される外見上の高齢者イメージである。さらに、そのような高齢者が外見上で表現するものは「腰が曲がる」、「足腰が弱い」、「身体が不自由」等のイメージに連動し、衰えていく高齢者像が形成される。学生の意識は外見上得られた身体的変化の特徴「知識や体験をとおして知っている高齢者」は次第に「身体機能が衰える」、「身体が弱くなっていく」ものとして映る。高齢者は身体症状として「目が不自由」で「難聴」になり、「食べ物が飲み込みにくい」、「運動機能が低下」等する。精神的には「認知症（痴呆症状）が多い」、「物忘れが多くなる」。健康面では「感染症になりやすい」、「多くの病気をもっている」、「慢性化して治りにくい」。そして、「独特な体臭がする」等という表現で「高齢者の一般的な特徴」として高齢者像が認識され始める。高齢者の「身体機能の低下」と「精神的な物忘れ」は次第に高齢者像を「年齢的に固定」し、社会的な「年金」、「敬老パス」、歴史的な「戦争体験者」という空間で理解する。「人生の大先輩」や「生き字引」、「知恵のある人たち」というのは、この文脈から発生する。機能低下や衰えを感じているので「寝たきり者が多い」や「オムツをつけている」というイメージや家族、地域社会から「孤立しやすい」し、「友達が少なくなる」という「弱者のイメージ」が前面にでる。

学生の高齢者像は身近な「私の祖父母」の日常生活をとおして、現実世界によび戻される。確かに身体機能の低下は日常生活の風景によくみられる。しかし、祖父母の生活世界はひとりの人間として文化的に様々な側面をもっているものとして学生に映っている。単なる高齢者の一般的なイメージとは違って「早寝・早起き」で「雨降り以外はゲートボールに行く」し、生活の楽しみ「歌が好き」や「散歩好き」、「テレビ好き」や「世間話が好き」、そして「バス旅行が好き」や「団体で行く温泉が好き」等にみだしていると捉えられている。日常生活にみる祖父母は「周囲の人や様子に気を遣う」し、「小さな子どもやペットが好き」で「孫に弱く」、「優しい」が「嫁の家事に文句をつける」し「若者の服装にも文句をつける」なかなかの存在であることも実感している。こうなると、ひとりの人間として対等な関係で評価するので「頑固者」、「わがまま」とも映る。「良きにつけ悪しきにつけ時々気になる存在」である。しかし、より個別的で個人的な人間像が浮かび上がってきているのが興味深い。

介護福祉学科で学ぶ学生は高齢者介護サービスを直接的に担う専門職として現場に出て行く立場にある。高齢者像の転換には高齢者介護サービスの対象になる高齢者の心身機能の低下を理解してもらうことが介護福祉教育の前提であり基礎になる。疑似体験後の高齢者に対するイメージは学生の心身機能との相違を実感させることになり、意識転換をはかる一つの方法である。「80歳になった未来の私の現実生活」は一気に学生を「80歳の日常生活」にタイムスリップさせている。学生は自らが高齢の身体機能低下の世界に入り「難聴で音や人の声が聞き取りにくい」、「視界がぼやける」、「視野が狭い」、「遠くの物が見えづらい」、「自分の身体全体がいつも重い」と疑似体験したことにより「坂がわからない」、「段差の始まりと終わりが分かりにくい」、「転び

やすい」,「周囲の障害物に気がつかない」,「後ろの人に気がつかない」こと等を「身近な高齢者の日常生活」として驚きをもって受け止めている。まるで「昔話の絵本に出てくるおじいさん・おばあさん」であり、疑似体験は身体機能の低下が進むと単に「足腰が弱くなる」のではなく、「身体のバランスが取れない」し、「段差につまずきやすい」状態が生じ、「物や障害物に気がついてもすぐに避けられない」事態に繋がるものであることを理解させている。

学生は「普段の生活とまったく異なる体験の連続パンチ」により、高齢者の日常生活について変化した認識を形成する。第1に、日常生活がいかに不便で困難なものであるかという認識である。「新聞が読めない」,「人の声が聞きづらく、まともな会話ができない」に始まって「和式トイレで膝が曲がらない」,「しゃがむのに苦労する」,「立ったり座ったりが大変に辛い」,「布団を敷くのは大変だ」,「お風呂で背中を洗うのは大変」,「座っているのが大変」,「椅子から立ち上がるのはもっと大変」という表現で、日常生活が大変という捉え方に新たな意識転換を読み取れる。第2に、自らの日常生活と比較して「スキップができない」,「財布から小銭が出しにくい」,「自販機が使いにくい」,「携帯電話のボタンが押せない」,「メールを打つのに時間がかかりすぎる」,「ファックスがしにくい」と実感し、この側面から大変なことだとも認識する。第3に、大変さがどのようなものかという認識である。「一つのことをするにも気合いが必要」,「動作が辛い」から始まって、「一人で歩くのが怖い」,「2階に行きたくない」,「階段が怖い」という。この怖いという表現は学生の日常生活と最も対極にある実感であり、「怖さ」が「大変さ」の中味を「不便と変化を強いられる日々の生活」と言い当てている。

学生は疑似体験をとおして「身体が辛いと気持ちが孤独になってくる」,「一人でいるのが不安」という表現で障害や不自由さ、痛さや身体の重さが精神的重圧と連動することを認識し、自らの日常生活から得られた高齢者イメージを転換させている。

学生は疑似体験をとおし、高齢者の日常生活が「渡る世間は危険がいっぱい」であり、「安心・安全の確保」へと関心が移り、高齢者イメージが変化をみせている。学生はどのような工夫や支援があれば障害や不自由を改善、緩和できるのかを考え始めている。第1に、「人が傍にいてくれると安心」というように、いつも傍に人がいること、人材こそが最大の安心であることをいい当てている。第2に、住宅改修へのイメージを膨らませ「和式トイレより洋式トイレの方が楽に座れる」,「段差のある所に手すりがあると安心で楽である」,「横に引くタイプのドアが使いやすい」,「スロープは歩くのに楽だ」等のようにユニバーサル・デザインに繋がる発想を次第にだしている。学生の意識変化は「安全な生活環境の必要性」に気づき、介護サービスの条件と実施体制へと発展をみせようとしていることが読み取れる。

学生の意識変化を促す試みは「きんさん・ぎんさんの世界」とそれまでの「知識や体験をとおして知っている高齢者」のイメージを転換させる方法を実施することにある。ここでは「高齢者へのインタビュー」とおして高齢者像を転換させる方法をとった。この結果、加齢により、身体の変化と衰えが相当なものであることを認識した学生が高齢者の普通の生活をとおして「知らない世界を体験している人たち」に出会い、もう一つのカルチャーショックを受け、「驚きと



感動に満ちた高齢者像」を描いていくことが分かる。学生は高齢者インタビューをとおし、高齢者の日常生活から今まで気がつかなかったり、知らなかったりした高齢者の生き方や普段の生活の様子を理解する。高齢者が「社会的弱者」であり、「同じような弱さ」と「特徴をもっている」とみていた高齢者像が変化する。何が学生の意識変化を促したかを簡潔に述べると次のような方法をとったからだと考える。

第1に、高齢者インタビューで高齢者一人ひとりの生活史を語ってもらったことが高齢者イメージの転換に繋がっている。学生は高齢者の生活史の中に歴史と社会と、そこをひたむきに生きてきた個別的で具体的な、きわめて個性的なひとりのかけがえのない人生と生き方を学んだのである。つまり、高齢者は画一的で平均的なものではなく、個別的で一人ひとりであり、決して高齢者一般でくくれるものでないことを理解した。

第2に、高齢者インタビューは歴史のなかで、当時の青少年がきわめて早い時期に労働につき、限られた教材と資料の中で技術を学び、戦争に翻弄され、その中で結婚し、子どもを育て、人とのふれ合いや関係を大事にし、物を大切に頑張り抜いてきたかを学んでいる。

第3に、生活に目標をもち、いろんなことに興味を抱き、かつて身につけた技術や知識を今の生活や趣味に活かし、「自分の生き方に自信と誇りをもっている」、「プライドをもって生活している」、「気持ち若い」、「おしゃれ」で「表情が豊か」で「人との交流を楽しんでいる」、「昔の話をする止まらなくなる」、「誰かに必要とされたいと思っている」、「お礼の手紙などをきちんと書く」し、「同じ高齢者でも一人ひとりの考え方が違う」とみている。このように高齢者観が大きく転換していることが分かる。

第4に、したがって「身近な高齢者の日常生活」はマイナスイメージではなく、肯定的な側面に切り替えて評価している。高齢者は社会的交流が大好きで「いつも誰かと一緒にいたい」、「旅行が大好き」と映ってくる。日常生活も「喫茶店で世間話をするのが好き」で「花作り」や「土いじり」が好きで「小さな動物が好き」である。身なりは「きれい好き」で「若い男が好き」そして「笑顔が可愛い」というように全体的にプラス思考の好意的な表現でみている。

第5に、高齢者の生活実態を理解した上で老化に伴う変化を考え、この文脈からもう一度、安心・安全の生活環境の整備や工夫、支援へと発展を循環させ始め、新たな気づきが生まれている。

学生の意識変化のプロセスは図1のとおりであるが、入学時の学生の高齢者意識は「きんさん・ぎんさんの世界」であったものが「疑似体験」により「普通の生活とまったく異なる体験の連続パンチ」に繋がり、不便、不自由さを超えた「怖さ」の実感が学生の意識変化を促している。しかし、「高齢者インタビュー」は個性的でたくましく生きている高齢者に接して「驚きと感動に満ちた高齢者像」のイメージが学生に形成された。これらの新たに獲得した学生の高齢者意識の変化のプロセスをみると、「きんさん・ぎんさんの世界」に出発したイメージが「疑似体験」により「弱さ」の質が「怖さ」に繋がることを知り、「高齢者インタビュー」でもう一つの高齢者イメージとして、明るさとたくましさの世界を理解している。この「弱さ」、「怖さ」から

「明るさ」、「たくましさ」への移行の中で、改めて「安全な生活環境の必要性」が再構築されていくプロセスが図1の意図した全体の相互関連がうかび上がってくる。

## (2) 学生の意識の変化の概念から生成したカテゴリー

学生の高齢者に対する意識から導き出した概念と概念の関係を検討し、一つの概念から二つ以上の概念に徐々に関係づけながら、新たに生成した概念をカテゴリーとして以下の図2のように作成した。図2から「学生の意識の変化の概念から生成したカテゴリー」を述べると次のように分類、整理できる。

1) 学生の高齢者に対する意識は、身近な場面での接触や交流経験、マスコミ等の情報、知識から得たもの等とおし、様々な状況の高齢者を外見的な特徴・身体機能の低下等により生じた問題とし理解している。また、社会的な高齢者の定義の一端も理解し、将来的に社会が果たすべき役割にも気づいていることから、「老化に伴って起こる行動の不自由さと苦痛の理解」とした。

2) 高齢者と同居している学生は、一週間のうちに何らかの関わりを最低でも1~2回以上はもっていると回答した学生が1/3以上を占めている。その生活経験をふまえ、高齢者の日常生活習慣が自分たちといかに異なっているのか、また、理解しがたい思いや嫌悪感、逆に優しく支えられていることへの感謝の気持ち等も体験的に理解している。高齢者は自分たちの生活スタイルと同じではなく、高齢者なりの生活スタイルを持ち工夫や配慮をしながら生活していることに気づいている。高齢者が生活している今の生活環境は決して高齢者にとり、安全で安心できる環境ではないことから、「健康・若さ・経済性が優先される生活環境」とした。

3) 疑似体験は、今までの学生生活を一変させ、好奇心や驚き、共感や刺激を受けている。今までは緩慢で動作が鈍く時間がかかる面倒な存在だった高齢者の日常生活の姿は、誰でもがいつかは同じようになることを理解し、介護者として支援の必要性に気づきが向いている。「(利用者)自身のペースで生活することの大切さと側面から支援する重要性」とした。

4) 疑似体験から、高齢者との距離感は縮まり、自らの老後の姿を思い描き考えられるようになっていく。介護者として危険性の回避の必要性にも気づいているので、「老化に伴って起こる危険・不安・孤独などを理解した上で、安全な社会システム構築の必要性」とした。

5) 高齢者は加齢により心身の機能が低下し、日常生活もスムーズに行うことができなくなっても、その人らしく、精一杯、一生懸命に生きていることに学生は感動している。自分たちと同じように青春時代があり、同じよう飛び跳ねて遊んでいたことに共感し、将来の自分の姿と重ね合わせ、自分もかくありたいと親しみをもち受け入れている。高齢者の消極的・積極的側面を正しく認識することは、今後の高齢者観を形成する上で重要であると考えられることから、「高齢者観の形成」とした。

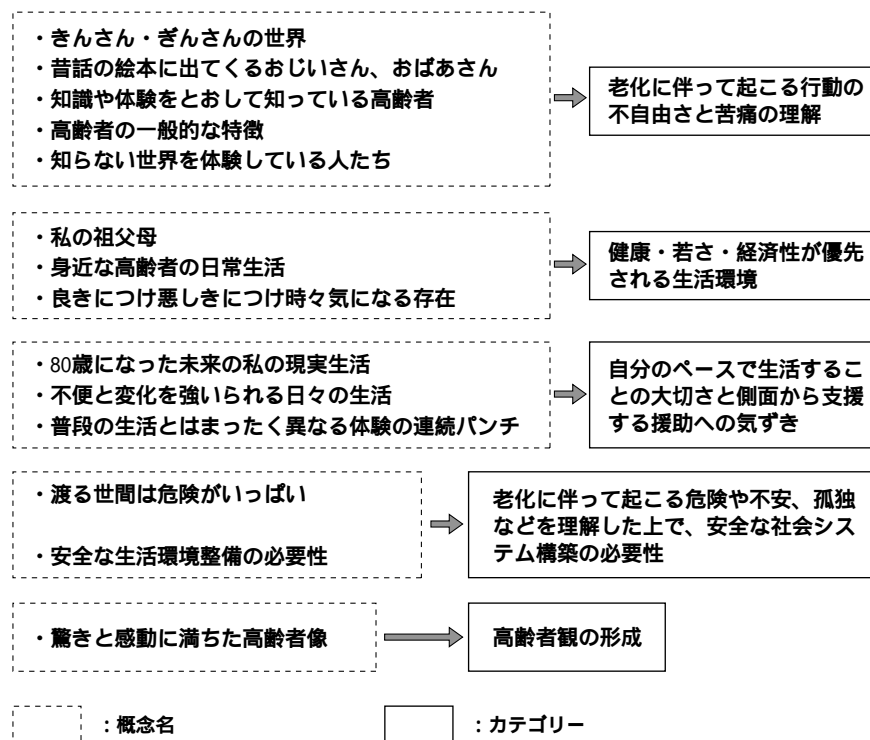


図2 学生の意識の変化の概念から生成したカテゴリー

### 3. 調査の結果の概括

学生が教員の準備した学習プログラムに沿って、学生自身が主体的に学習してきた結果、高齢者を見て知っている・接して分かっているレベルから、実感できる・実際に感じて理解できるレベルに到達したプロセスを以下の図3にまとめた。

図3から学生の高齢者観の意識変化を概括的に述べると、それぞれの到達した一定の段階を読み取ることができる。

第1に、「老化に伴って起こる行動の不自由さと苦痛の理解」は入学直後の「きんさん・ぎんさんの世界」それまでの「知識や体験をとおして知っている高齢者」のイメージ、つまり、「高齢者の一般的な特徴」が何によって意識変化を起こすのかということである。学生の高齢者イメージは「私の祖父母」、「身近な高齢者の日常生活」によって形成されたものである。この体験からイメージした主観的な捉え方を学生の「知らない世界」へ旅立たせ、客観化させる体験をとおして新たな高齢者イメージを問題提起していく作業が介護福祉教で必要だということである。介護福祉教育の現場ではカリキュラムにそって講義、演習を組み合わせ、現場実習への準備をする。「老化に伴って起こる行動の不自由さと苦痛の理解」は何らかの衝撃や感動を伴う体験を経過しないと難しい。学生の意識変化は、まず入学直後の高齢者イメージがどのようなものであるかを

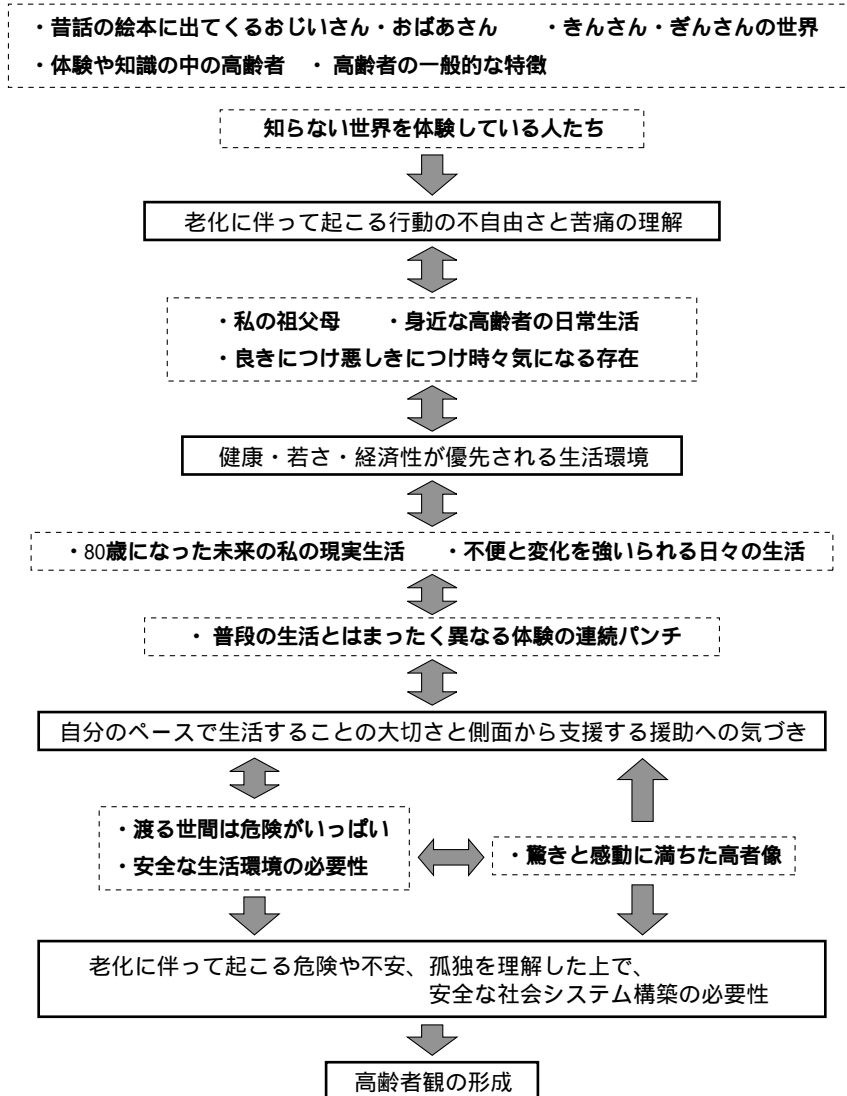


図3 結果図

表現させ、各自がもっている生活世界での主観的な高齢者観を自覚させることが重要になる。この体験学習の試みが「疑似体験」と「高齢者インタビュー」であることはすでに述べたとおりである。

第2に、第1の到達段階へ高齢者イメージを変化、転換させるうえで実践的な課題として浮かび上がってくるのは「健康・若さ・経済性が優先される生活環境」という、学生を取りまく日常生活の価値観である。「ピンピン・コロリ」や「ポックリ寺信仰」まであり、八事興正寺、遠くは巢鴨の地藏さんに至る、極楽往生の思想が「身近な高齢者の日常生活」から生活文化として学生の意識に入り込んでくる。高齢者を身体機能が低下していく存在として理解しながら「年金」

と「敬老バス」を持ち「花柄の服装が好き」という生活環境の狭間に揺れている。この「体験と知識の中の高齢者」イメージをどう転換、変化させていくかという実践的課題は丁寧に学生と向き合いながら、学生自らが、学生の言葉と表現で語る場と機会をつくっていく共同（協同）作業を必要とする。

第3に、「自分のペースで生活することの大切さと側面から支援する援助への気ずき」は、第2の実践的課題へ取り組み、第1の課題へ迫っていくその二つの課題の影響力を行使していく発信源の位置にある。第3の位置は、学生の意識変化を促す起爆剤的役割をもっている。それは疑似体験をとおして、今までの「体験や知識の中の高齢者」イメージが大きく変化しており、調査結果で実証されたと分析できる。学生は「80歳になった未来の私の現実世界」を自ら体験したのである。これは今までの学生の生活世界で形成された高齢者イメージを根底から転換させるほどの衝撃をもって受け止められている。学生の体験は当初に予想した「不便と変化を強いられる日々の生活」というイメージよりも「渡る世間は危険がいっぱい」を実感し、初めて身体機能の低下による「怖さ」を理解できた。これは今までの学生の価値観を変えるカルチャーショックそのものである。この疑似体験をとおして、学生は「身近な高齢者の日常生活」が「健康・若さ・経済性が優先される生活環境」になっており、「安全な生活環境の必要性」を認識している。つまり、ここで価値観の転換が図られていることに注目しておきたい。

今一つ、学生の価値観を変化させ、転換させる役割を果たしたのは「高齢者インタビュー」である。地元社会福祉協議会のご紹介による町内の老人会会員は「私の祖父母」のイメージを超え、「体験や知識の中の高齢者」とも違って、社会的役割を引き受け、社会関係を大切に、若い時からの労働と生活で獲得した知識と技術を活かして、誇りと目標をもって人生を生き抜いてきた。一人ひとりが個性的で、一人ひとりが自分の人生を切り拓いて、今日なお輝いていた。学生は「自分のペースで生活することの大切さ」を敏感に学びとっている。私の「祖父母」を超えた、もう一つの高齢者像を「驚きと感動」をもって理解している。地元町内会の老人会員はマスコミに登場するサクセスストーリーの主人公でも億万長者でもなければ有名人でもない。恥ずかしがり屋で控えめだが、労働と人生に誇りをもち、話好きで、周囲の人たちや社会関係を大切にしている姿に「驚きと感動」を抱いている。学生のもつこの感性があれば、庶民のひたむきに生きてきた生活史に感動する心があれば、当事者本位のサービスの出発点に立てる。もう、その第一歩を踏み出したといえるのかもしれない。

第4に、「老化に伴って起こる危険や不安、孤独を理解したうえで安全な社会システム構築の必要性」は、主として「疑似体験」から得られた高齢者イメージの転換によって形成されたカテゴリーである。学生が「小さな坂や段差も気づかない」、「周囲の障害物に気づくのが遅くなる」、「視界がぼやけ視野が狭い」、「遠くの物が見えづらい」、「難聴で音や人の声が聞きとりにくい」、「手足の自由がきかない」、「動くのが辛い」と実感したときの想像を超える「危険や不安」が「安全な社会システム構築の必要性」へと繋がっている。

最後に、「高齢者観の形成」は「きんさん・ぎんさんの世界」、「私の祖父母」から得られてい

る高齢者イメージの転換をさしている。学生は「疑似体験」、「高齢者インタビュー」をとおして、「衝撃」、「驚きと感動」を伴う形で意識変化がもたらされ、イメージ転換したことによって新たに獲得し、形成した価値観である。介護福祉サービスの当事者本位の理念と思想はこの新たに形成された「高齢者観」によって、介護福祉教育の理念と実際を学ぶカリキュラムに活かされていくことになる。学生のそれまでの生活世界で得られた主観的な高齢者イメージを介護福祉教育の理念と目標に沿うフィールドへ転換させる場と機会の一つの方法として、この調査が一定の有効性をもっているものと結論づけられる。

### 結びにかえて - 調査結果からみた介護福祉教育の課題についての考察 -

介護福祉教育は入学直後の学生実態から横断的にみれば現代青年論で議論されるニートやフリーター問題に繋がるものをもっている点は否定できない。しかし、学生は介護福祉教育への何らかの関心をもって、たとえ消去法で積極的でないにしても、この分野で介護福祉士をめざそうとしている。このことを高く評価し、介護福祉教育への導入に向けた筋道をつけていく必要が筆者達に課せられている。

本論文を構成していくうえで、研究方法として意図したことは、まず、学生の実態と特徴を理解することから出発するという、あたり前の調査方法から取り組んでいる。

学生は基本属性からみると持ち家に住む者が多数で、父親も正社員が多く、母親の職業も1/3が福祉・介護・保健・医療関連職というように比較的安定している。家族構成も4～5人が半数以上を占め、約半数は祖父母と週1回以上の交流をもっている。入学動機もボランティア活動の経験を多くがもっており、学生の2/3は進路を自らが決めている。

しかし、学生の生活実態は基本的な生活習慣と健康管理において多くの問題をもっている。「朝食を食べない・食べられない」に始まり、就寝に際して「寝間着を持っていない・寝間着を着ない」学生が多数派である。健康管理は「排便が10日以上ない学生」もいる。このような生活態度で介護福祉教育を講義し、演習を行っても実習にはだせない。学生の生活意識にいくら問題があってもつき離すわけにはいかない。よくみると「もったいない」を理解できる学生が多い。だが高齢者の「もったいない」と学生の「もったいない」にはジェネレーションギャップがある。たとえば、高齢者は梅干しに「土用干し」のイメージが重なり、梅干しに込められた思いと手間暇を考えるか、それともスーパーで「お金」でいつでも買える手間のかからない物としてみるかに生活文化の違いがある。この世代間の生活文化の違いをどう理解しあい、共感できるものにしていくかが課題になっている。

現代の青年が高齢者と生活文化のジェネレーションギャップをもつことは当然のことで、学生の意識変化をはかり、高齢者理解へ結びつけていくのが介護福祉教育の入門期に必要となる。介護福祉教育は、通常2年間の教育プログラムで有資格を授与することから時間猶予はない。つまり、入学直後が介護福祉教育への動機づけとして重要な時期になる。

本研究は本論で展開したように、研究方法として入学直後の調査から入っている。まず、学生

の高齢者イメージがどのようなものであるかを把握し、知識として意識変化を教えるのではなく、学生の気づきによる意識転換が方法論的に必要だと考えた。その理由は、現代青年論のニートでいう引きこもり等は「上から与える」方式で青年の意識変化ができないことを示している。教員と学生の相互信頼を基礎として、学生の参加と協働により自ら気づき「何とかしなければ」という発想に繋がる感性に働きかける方法が仮説的に浮かびあがる。調査の企画は、学生が今までつくりあげてきた高齢者イメージに疑問を与え、一度壊して新たなものに再編していくシナリオから発想する以外ない。

「疑似体験」は自らを超高齢者の世界へ誘う方法である。学生は初めて自らの身体を自己コントロールするのが難しく「怖さ」まで伴う生活世界を体験する。「疑似体験」は衝撃的な形で介護福祉教育の対象者理解を促している。学生は自らの心身の状態を基準に「多少困難な人たち」と想像し、理解していたイメージがここで壊され、新たな認識を獲得している。一方の「高齢者インタビュー」は老人会会員調査であり、調査対象が一般高齢者である。学生の世代間ギャップをみすえ、高齢者の生活文化を理解できる方法として実施した。この調査方法は調査目的を学生と老人会会員に理解してもらう企画と実施までのサポートを必要とするが、この点をクリアできると興味深い結果がでてくる。<sup>(注6)</sup>「高齢者インタビュー」の教訓は、老人会会員と学生の相互関係、協働をどう引きだすかということにあった。老人会会員は依頼を受け、インタビューに備えて何日も前から自らの生活史を振り返り、整理し、メモまで作っていた。会員が学生だということで一定の緊張感を持ち、孫に語りかけるような優しさで自らの人生を誇りをもって伝えている。

インタビューの対象者は老人会会員として、今でも忙しく社会的役割を持ち、生き生きとし若さを維持しながら、継続は力なりと目標をもったスローライフはやがて実を結ぶことを「驚きと感動」を与える形で学生に伝えている。介護福祉教育は地域の力、高齢者の参加を得ることによって学生の意識変化を促すことができる点に注目しなければならないことを教えてくれる。この企画は老人会会員にとっても新たな社会的役割と活動に繋がり、次の世代を地域において教育していく相互交流の一つになるのではないかと考えられる。

本研究は介護福祉学科で学ぶ学生の高齢者意識の実態を把握し、その高齢者イメージを転換させることによって介護福祉専門職の課題に迫るものとして取り組んだ。研究成果としては、現代青年論の課題に対して介護福祉教育をとおしてどのように取り組んだらいいのかについて、一定の教訓を引き出したことが上げられる。しかし、今後の研究課題として、「疑似体験」にも幾つかのレベルや方法がある。学生の教育のどの時期にどのような方法が適切かについて、さらに先行研究を検討し改善を加えていかなければならない。

また、「高齢者インタビュー」は、高齢者の生活史の聞き取りが世代間のジェネレーションギャップをうめ、高齢者一人ひとりの個性と尊厳に気づきいく点で一定の成果を得た。しかし、生活史調査の方法として労働（職業歴）を基軸としながら、介護福祉教育の側面から何を主要項目にしたらいいのか等については残された研究課題である。

今後、介護福祉教育の現場から何を研究すべきかを明らかにしたところでこの研究は終わっている。不十分な分析や考察に止まっているところもさらなる研究が必要なものと認識している。

本論文は2004年度日本福祉大学院社会福祉研究科福祉マネジメント専攻における修士論文を素材にして論旨の再構成をはかったうえで作成したものであることをお断りしておきたい。

本論文は介護福祉学科で学ぶ学生の実態と意識、そこでの教育課題に論点を絞っている。このため修士論文の介護福祉教育の発展過程の考察、つまり、政策・理論動向を削除している。さらに、論点を多義的にしないために高齢者意識調査の量的分析、地元老人会へ的高齢者インタビューのまとめ等も取り入れていない。学生の介護意識の変容過程をみるうえで高齢者インタビューも興味深いものがあった。しかし、これらのデータは今後の研究課題と結びつけてさらに次の研究に活かしていきたいと考えている。

最後に本論文は実習等で追いまくられている教育現場から書いたもので、当学科の教員のご理解・協力があつた。また、支えてくれた学生達、調査に応じてくださった老人会会員の皆さま達のご援助の賜である。

また、査読者からは示唆に富む貴重な査読コメントをいただきました。深謝いたします。

## 注

- (1) 聞き取り調査内容の詳細は省略するが、学生の生活実態は想像を絶する例が数多くあつた。家庭生活の実態も筆者の経験からは考えられない現実もあり、現代の学生の実像を知るためには家庭生活を含め、生活実態を詳しく把握し分析していく必要性を改めて実感している。
- (2) 学生によるインタビューの内容は、事前準備、インタビューの実際、インタビュー内容をレポートとして一人1200字程度にまとめたものを、学生は高齢者の言動の何に関心をもったのか、その言動を学生はどのように感じ、どのように反応したか、高齢者の言動について学生は何を考えたのかの3点について整理し分析した。結果のまとめは別の機会に報告したい。
- (3) KT-27高齢者体験装具“おいたろう”(京都科学)は、手足に重りやサポーターを装着することで運動能力を80歳前後に低下させるための高齢者疑似体験用装具類である。高齢者体験装具で利き手、利き足の関節にサポーターの装着と重りをつけ、上下肢の半身の動きを制限し、足・手首の招きの抑制も加え、肩チョッキの着用と重りで上半身の重心を不安定にさせ、耳栓、耳当てとメガネで聴覚・視覚の機能制限、手袋の着用で触覚機能の低下をはかり、杖を使用し歩行したり等のさまざまな高齢者体験を試みる装具である。
- (4) 学生を二人～三人を1組とし順次装着し疑似体験を実施した。また、疑似高齢者以外の学生は介護者役として疑似高齢者の身近で支援する役割を体験させ、高齢者の日常生活の疑似体



験と介護者の役割をグループで相互に体験できるようにした。

### 引用・参考文献一覧

- 1) 三浦文夫, 田端光美, 大橋謙策 2002.4 「第5章戦後社会福祉におけるマンパワー対策と社会福祉教育の課題」『戦後社会福祉の総括と21世紀への展望 政策と制度』236.
- 2) 日本学生相談会 2004.3 「第41回全国学生相談研修報告書」
- 3) 山下恵子, 尾台安子 2003.7 「介護学生の生活実態と健康に対する意識」『介護福祉教育』第5巻第1号. 41-45.
- 4) 松峰修他 「大学生の生活の質に関する『大学生生活調査カタログ』の開発」
- 5) 厚生労働省 2003.8 『厚生労働白書』詳細データ「ボランティア活動の現状」449.
- 6) 山下恵子, 尾台安子 2003.7 「介護学生の生活実態と健康に関する意識」『介護福祉教育』第9巻第1号. 41-45.
- 7) 高桑秀朗, 我妻美智子, 石井洋子, 高橋信子 2000.2 「短大生の生活健康 調査( )」羽陽学園短期大学紀要第6巻第2号. 146-160.
- 8) 安藤達彦, 館博, 飯生明子, 吉田宗広, 網元愛子, 野田喜代 1999.3 「若年層における健康に対する知識と食行動に関する研究」健康文化第5回研究助成論文. 10-19.
- 9) 数金昭見, 飯田朝子 1999 「女子大生の生活行動に関する研究」大妻女子大学紀要35号 27-144.
- 10) 朝日新聞 2004.9.19. 朝刊「大学生よ朝食を」22.
- 11) 作山美智子, 松井匡 2004 「介護福祉専攻学生の入学動機および介護意識に関する調査」第10巻第1号. No.18. 30-34.
- 12) 吉本知恵, 横川絹恵, 一原由美子 2003.3 「看護学生の高齢者イメージ - 平成11年度入学生と平成14年度入学生の比較」地域環境保健福祉研究第6巻第2号. 31-37.
- 13) 千田みゆき 1997 「疑似体験演習による高齢障害者に対する看護学生の意識の変化」埼玉医科大学短期大学紀要第8巻. 19-32.
- 14) 保坂久美子・袖井孝子 「大学生の老人観」老年社会科学 8巻. 103-116.
- 15) 宮地緑, 赤木知子 1993 「老人看護学演習における老いの体験学習」『看護教育』医学書院 Vol.34. No11. 870.
- 16) 佐藤弘実, 永江美千代, 黒田久美子, 正木治恵, 野口美和子 1993 「老人理解のための体験学習」『看護展望』Vol.18. No.8. 32-36.
- 17) 中川米造 1991 「医学教育における体験体験学習」『月刊ナーシング』11(4) 57.
- 18) 大滝淳司 1993 「日本の看護教育への模擬患者導入の意義」『看護展望』Vol.18. No.8. 49.
- 19) 藤崎和彦 1993 「アメリカの医学教育における模擬患者の導入の現状とその理論」『看護展望』Vol.18. No.8. 44-48.
- 20) 木下健仁 2003.8 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂

## 添付資料 1

## 介護福祉学科学生アンケート調査のお願い

愛知江南短期大学社会福祉学科に進学した皆さんの実態を把握し、今後の介護福祉教育に活かしていくための調査です。この調査は無記名で、この回答は、調査目的以外には使用しません。ありのままを答えてください。ご協力をお願いいたします。

アンケートの回答は、それぞれの事項ごとに、当てはまる番号を 印で囲んでください。記述が必要な場合は( )内に記入してください。

1. 学年      1年      2年
  
2. 性別      男子      女子
  
3. 家族構成    何人(      )人
  
4. きょうだいは何人ですか (      )人
  
5. あなたの続柄 (      )
  
6. あなたの祖父母は健在ですか      健在      全員亡くなっている
  - 1) 祖父母がある方のみにお聞きします。祖父母との同居について  
 同居している    同居していない    過去にしていた    同居の予定がある  
 二世帯住宅    その他(      )
  - 2) 同居の有無に関わらず、祖父母との交流(挨拶、会話、一緒に食事をする等)についてお聞きします  
 ほぼ毎日ある    一週間に3～4回位はある    一週間に1～2回位はある  
 一ヶ月に1～2回位はある    半年に1回位はある    一年に1回位はある  
 数年に1回位はある    ほとんどない    その他(      )
  
7. あなたの両親の年齢をお聞きします
  - 1) 父親      39歳以下    40～44歳    45～49歳    50～54歳    55～59歳  
 60～64歳    65～69歳    わからない    死亡    その他(      )歳
  - 2) 母親      39歳以下    40～44歳    45～49歳    50～54歳    55～59歳  
 60～64歳    65～69歳    わからない    死亡    その他(      )歳

## 8. 家族の主な職業をお聞きます

- 1) 父親 雇用の正社員 雇用でパート 自営業 農業 公務員 自由業  
無職 福祉・介護関連職 保健・医療関連職 わからない  
その他( )
- 2) 母親 雇用の正社員 雇用でパート 自営業 農業 公務員 自由業  
無職(専業主婦) 福祉・介護関連職 保健・医療関連職 わからない  
その他( )

## 9. 家族の住居の形態をお聞きます

- 持ち家(分譲マンション含) 民間賃貸住宅 賃貸公営住宅 社宅・公務員住宅  
間借り その他( )

## 10. 現在のあなたの住まいをお聞きます

- 自宅通学 一人暮らし 学生寮 親類・知人宅 その他( )

## 11. ボランティア活動についてについてお聞きます(内容、期間は問いません)

- 1) 入学までのボランティア活動の有無 活動経験がある 活動経験はない
- 2) ボランティア活動への関心について  
非常に興味がある ある程度関心がある あまり関心がない  
ほとんど関心がない わからない その他( )
- 3) 入学までにボランティア活動をした方にお聞きます。それはどのような活動でしたか。(複数回答可)  
高齢者支援 障害者支援 幼児・児童支援 環境保護・リサイクル活動  
子ども会や地域の方々との地域活動 災害復興支援 スポーツ指導  
外国人支援 募金活動・チャリティバザー ボーイ・ガールスカウト活動  
その他( )
- 4) ボランティア活動が進学に与えた影響についてお聞きます  
非常にある ある程度ある あまり関係ない 関係ない わからない
- 5) 入学までにボランティア活動をしたことがない方にお聞きます。それはどのような理由からですか。(複数回答可)  
忙しくて時間がなかった きっかけや機会がなかった 関心や興味がなかった  
適当な活動の場が見つからなかった 活動に必要な情報が得られなかった  
一緒に活動する仲間がいなかった 身近に活動している人や誘ってくれる人がいなかった  
活動に必要な知識・技能を身につける機会がなかった わからない  
家族や周囲の理解が得られなかった 特に理由はない その他( )

